

三本木原の開墾は、幕末の1855（安政2）年、盛岡藩士新渡戸伝と十次郎父子のもとで事業が進められ、掘削された灌漑用水路は盛岡藩主南部利剛により、この地が実り豊かになるようにと願いをこめて「稻生川」と命名された。このエピソードを多くの

十和田市民は郷土学習で学んでいる。しかし、その後の歴史はあまり知られていないように思われる。三本木原開拓事業の変遷を述べていこう。

明治になり、伝と十次郎が相次いで死去したため、事業は中止となった。1872（明治5）年、斗



三本木駅前を流れる稻生川=1958（昭和33）年・野坂千之助さん撮影提供
駅は後に十和田市駅となるが、廃止され現在は存在しない。

南士族（旧会津藩士）の士族授産として、三本木開墾事業を行う陸奥国農会社が設立された。しかし、収穫量が上がらず、3年後に事業は廃止となった。1876（明治9）年の天皇巡幸に際し、三本木原開墾地が視察の対象となった。これを契機に、政府の殖産興業政策もあり、1884（明治17）年に三本木共立開墾会社（のち三

三本木原開拓

〜新渡戸伝から国営開墾へ〜

宮本 利行

（青森県立三本木
高等学校教頭）

本木開墾会社と改称）が設立され、開墾事業が再開された。このとき経営資金のことで問題が発生し、救済のため会社の株式の多くを渋沢栄一が引き受けることになり、渋沢農場が設立された。

1923（大正12）年、三本木開墾会社に代わり、稲生耕地整理組合組織会が結成された。渋沢農場の管理人で、組織会理事長の水

野陳好は、新たな水源として奥入瀬川源流の十和田湖に着目。十和田湖水を利用した国営開墾の実現を図った。1927（昭和2）年、稲生耕地整理組合組織会は、国営開墾実現に向けた運動のため発展的に解散。上北大規模開墾期成会（のち三本木原大規模開墾期成会と改称）が設立され、期成会が国営開墾運動の中心となった。

この時期、十和田保勝会や十和田村が中心となり、十和田湖と奥入瀬溪流の国立公園指定運動が展開されていた。国立公園指定推進派は、湖水の灌漑用水利用で水位を人為的に調節すると、十和田湖と奥入瀬溪流の環境が破壊されるので、開墾計画の中止を求めた。国立公園指定推進派と国営開墾推進派の対立となったが、推進派が奥入瀬溪流を使用しない環境保護を前提に開墾計画を提案したことで対立は解消した。

1937（昭和12）年、国営開墾事業の工事が始まった。工事は十和田湖青楓地区に取水口を設け、水路を掘削するものだった。

戦時体制下、国内の食糧自給強化のため、工事は最優先で進められた。三本木女学校（後の三本木高校）や三本木農学校（後の三本木農業恵拓高校）などの勤労奉仕隊まで動員して行われ、1944（昭和19）年に開墾事業は一段落した。

戦後、食糧不足と引揚者の扶助のため開拓が必要となり、第2次国営開墾事業が開始された。このとき開墾の対象になったのは、軍の解散によって解放された軍馬補充部の土地だった。稲生川土地改良区をはじめ12改良区が連合してあたり、1966（昭和41）年に三本木原開拓事業は完了した。

開墾地は新渡戸伝らが始めた時から30倍以上に拡大した。事業は盛岡藩新渡戸家から始まり、明治政府の殖産興業政策、会社組織による開墾、そして国営開墾と変遷しながら100年以上にわたり引き継がれた。その長い歴史の中に、戦争や食糧増産など、当時の時代的要請が背景にあったことも知っておかねばならない。